

## + 2 【おにどくろ】

【がしゃどくろ】とちがう、【がしゃどくろ】よりもずっとおそろしい髑髏（どくろ）が、最近出没（しゅつぼつ）するといっているので、懐爺のところへいきいてみました。

「どこがおそろしいんじゃない」

「それは【おにどくろ】といいます」

「おにのどくろかい」

「はい。鬼が死ぬに死ねず、髑髏のおばけになったものですから、鬼のおそろしさと髑髏のおそろしさが合体（がったい）してます」

「ふん。いちかけるいちは、いちじゃろ」

「かけないでたしてください。いちたすいちはにです」

懐爺は指を二本出しました。

「その【おにどくろ】に、なんとかあえないもんかのう」

ぼくは頼んでみました。

「会えません」

懐爺は断固（だんこ）としていいました。

「あわせろや」

「会わせられません」

「なんとかせいや」

「何ともなりません」

「そこをなんとかできんかのう」

「山田さんも川田さんも原田さんも、【おにどくろ】退治に行って、逆に【おにどくろ】に食われてしまったんですよ。それでその三人もいまは新しい【おにどくろ】になって、獲物を探しています」

「わしはくわれるまえに、ともだちになる」

「ともだちがいないから【おにどくろ】になってしまったんで、ともだちができる性格なら【おにどくろ】なんかにはなりません」

「そういうもんかのう」

「金ちゃんは、命が惜しくはないんですか」

「いのちよりも、おばけじゃ」

「なるほど。金ちゃんは死んでおばけになりたいんですね」

「ばれたかのう」

「残念ですが、金ちゃんは死んでもおぼけにはなれませんよ」

「どうしてじゃい」

「どうもこうも、金ちゃんは此の世の人間に恨みなんかもっていないでしょう。此の世の人間をいじめる気なんかないでしょう」

「うらみはないけど、しんだらうらみがでる。いじめるきはないけど、しんだらいじめたくなる」

「困った性格ですね」

懐爺は頭をかかえました。

何となく形勢有利（けいせいゆうり）とおもえてきました。

「あわせるんじゃない」

「わたしはおぼけの紹介人ではありません。それに」

「それに、なんじゃ」

「金ちゃんが【おにどくろ】にぺろりぺろり、むしゃりむしゃりと食われてしまったら、わたしは寂しくて生きてはいけません」

懐爺は、【おにどくろ】が人を食べる様子を実演してみせてくれました。

ぺろりぺろりんこ

むしゃむしゃりん

ぐじゅりぐじゅん

がつんがつがつん

ぐぐいぐぐんんぐ

むぐうむぐんんぐ

その様子を見ていると、【おにどくろ】に食われるのだけは、死ぬよりも嫌だとおもわれました。

それと、寂しくて生きてはいけないとってくれた懐爺のために、死にたくないとおもいました。

それでぼくは、【おにどくろ】に会うことができなかったのです。